

第42回高知女子大学看護学会 ワークショップ

ワークショップ 1 :

急性期病院を地域包括ケアに拓く方略



【コーディネーター】

内川 洋子

(高知県立大学 博士10期)

【企画の意図】

安心してその人らしい生活ができるように、急性期病院と在宅、地域の病院とを繋ぐ取り組みの中で見えてきた課題についての話題提供をもとに、安心してその人らしい生活ができるための看護支援を可視化するためには何が必要なのかについて検討する。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

山田 悦子 氏

(愛媛県立南宇和病院 看護部長)

「地域に病院を拓く」というテーマで話題提供をしていただいた。地域に病院を拓くための取り組みとして、退院支援の強化、療養支援の強化、地域との繋がりの強化の3つの方略について紹介をしていただいた。

久保田 聡 美 氏

(高陵病院 教育顧問)

在宅支援の立場から地域包括ケアに関する話題提供をしていただいた。急性期病院における退院支援やその後の地域連携において、患者や家族への説明の在り方、ターニングポイントにおける情報共有の仕組みづくり、地域の社会資源の実情を把握した上でのケアの創造について問題提起をしていただいた。

【ディスカッション内容】

生活や医療依存度を見据えてのケアの創造が必要であるという共通理解のもとにディスカッションを行った。退院支援をどの看護師が中心になって行うのがいいのかという質問に対し、受け持ちの看護師に求められる能力であるが、実際は調整能力のある看護師、退院支援看護チーム等が行っていることが分かった。またターニングポイントにおいて患者に寄り添うケアや情報共有はできているのか、サービスが分断化しているものを統合化していくことが必要という意見がでた。看護は患者・家族の意思決定を支えケアを構築し、多機関、多職種と情報共有するためにも看護を可視化し、情報共有のためのシステム作りが必要であることをまとめとして終了した。

ワークショップ 2 :

在宅移行支援と地域生活支援を可視化する —その子とそのらしく生活する場を創る—



【コーディネーター】

佐東 美緒

(高知県立大学)

【企画の意図】

小児看護の対象となる子どもや家族は、変化する環境や健康状態に対応しながら、多職種と協働して、その子とそのらしい生活を営めるように、生活の場を創っている。今回、どのように小児看護を可視化できるか、そのことがその子とそのらしく生活する場にどのように繋がるのかについて参加者とともに検討することを目的とした。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

石 浦 光 世 氏

(大阪発達総合療育センター 小児看護専門
看護師 修士1期)

児童発達支援センターでの看護師の役割には、児童発達支援の3つの柱に基づいた、①その子の持つ最大限の発達を促し、可能な限り、子どもの「生活する力」を育てる発達支援、②家族への寄り添いや、子どもの身体状態の安定を含めた子育て支援などの家族支援、③地域の保育園や幼稚園の移行、就学を見通した地域連携による地域移行支援などがある。これらの支援の中で看護師の役割や取り組みを確立するには、お互いの役割を「伝え、見せる」ことが必要であるということ、実践例を交えながら語っていただいた。

鋤 田 晃 子 氏

(熊本市民病院 小児看護専門看護師 修士12
期)

災害時の地域療養支援について、熊本地震での経験を踏まえて語っていただいた。看護師は、通常と異なる環境下で、在宅療養中の子どもの生命力の消耗を最小限に留め、身体状態の安定を図るために福祉避難所の環境を整え、災害時であっても、子どもの健康の維持増進、成長発達を支援し、家族とともに生活の再構築に取り組み、他機関との調整、交渉をしながら、子どもの自己実現への支援をされていた。

【ディスカッション内容】

小児看護に携わる看護専門職者として何ができるのか、それを発信していくことの重要性を感じた。看護実践を可視化することによって、①児童発達支援では多職種と重なり合う役割の中で、看護にしかできない部分を明確にし多職種に伝えることができ、お互いの専門性を確かめ、発揮できるように支えあうことが可能となり、②災害などでは日頃からの多職種の連携の必要性など、今後の災害看護への示唆となった。さらに、子どもと家族にどのような変化をもたらしたのか、子どもや家族がその場で何を語ったかを明文化し発信することは、子どもや家族を主体としながら、看護の可視化がどのような

効果をもたらすのかを意識し、取り組むことが重要であるということが話し合われた。

ワークショップ3：

**慢性心不全を増悪させないための看護の
取り組み－生活支援の仕組みづくりと今後の
課題－**



【コーディネーター】

内 田 雅 子

(高知県立大学)

【企画の意図】

社会の高齢化と医療技術の進歩により慢性心不全患者は増加の一途を辿っており、医療機関では心不全患者の入退院の繰り返しが、そして地域では在宅療養の継続困難が大きな問題となっています。心不全は患者・家族にとって強い不安感をもたらす病気でありながら、異常の早期発見や対処判断が難しい病気といえます。特に高知県は、無医地区が全国第3位、人口10万人あたりのベッド数が全国第1位であり、心不全への不安から在宅療養の継続よりも入院加療が選択されやすい環境にあるといえます。このような地域特性を踏まえて、その人らしい生活を送れるよういかに支援するかが看護においてきわめて重要な課題となっています。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

窪 田 美 穂 氏

(高知医療センター 慢性心不全看護認定看護
師)

「心不全で再入院を繰り返さないための入院時の仕組みづくり」について、高知医療センター循環器病棟で看護師スタッフが開発した患者教

育プログラム「ハートプログラム」を中心にご報告いただきました。また実施状況から浮上してきた課題として、患者教育力の育成や在宅療養への連携等についてご発表いただきました。

高 樽 由 美 氏

(高知県立大学 慢性疾患看護専門看護師 修士8期・博士12期)

岡山大学病院心臓リハビリテーション外来における「心臓リハビリテーション外来を通じた在宅での療養生活を支える場づくり」の活動についてご報告いただきました。受診者を対象に急性・重症患者看護CNSやICUの看護師と連携して、再発予防や異常の早期発見を強化する患者教育のシステムをつくられた経験についてご発表いただきました。

【ディスカッション内容】

参加者より、2名の話題内容への共感、地域や病院組織の違いによる困難感などの感想が聞かれました。さらに慢性心不全患者の看護の現状と課題について、病棟、外来、訪問看護ステーション、あるいは家族などそれぞれの立場から体験に即した意見交換がなされました。そして、各々の取り組みの限界を実感し、改めて高齢化における慢性心不全患者の病院と地域をつなぐ仕組みづくりの重要性が再認識されました。

ワークショップ4：

ハイリスク妊産褥婦の継続看護の可視化
—実践と研究から看護介入を考える—



【コーディネーター】

関 正 節

(高知医療センター 修士11期)

【企画の意図】

ハイリスク妊産褥婦に対し関わる看護職者は、妊娠・出産・育児の各時期において所属する部署が違い、継続した看護が難しい状況にある。その現状と課題を見出すとともに、ハイリスク妊産褥婦の自信を高める看護介入について紹介し、周産期の継続的看護を可視化する目的でディスカッションを行なう。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

小 西 真千子 氏

(神戸市立医療センター中央市民病院 母性看護専門看護師)

妊娠中から出産後におけるチーム間での看護実践の共有や他部署との効果的な連携、退院後支援について専門看護師としての実践を紹介された。看護単位が異なると時間の共有が難しいが、一連の看護過程を振り返る場を持つこと、看護記録に残すこと、周産期チームとして部署間での協働のあり方を語れる場を持つことで看護の方向性を検討できることなどが提案された。

岩 崎 順 子 氏

(高知県立大学看護学部 修士1期)

低出生体重児を抱える母親の Maternal Confidenceを育む看護介入プログラムの開発に関する研究結果について紹介された。母親が育児に関する自信を高めていくためには、各時期における専門職者の関わりが重要であり、効果的な看護支援が望まれる。しかし、妊娠期よりハイリスク妊産褥婦は、予期せぬ出来事への悲嘆、自責の念があり成功体験を積み重ねることができず経過している。日々、関わる看護者は、効果的な明確な看護介入のもと、関心を持って関わる能力と連携の方法を融合し、一つひとつのプロセスを支援していくことが重要であると語られた。

【ディスカッション内容】

産科病棟やNICU/GCUなどの看護師・助産師、行政の保健師などが参加され、それぞれの立場から積極的な意見交換がなされた。妊娠・出産・育児のプロセスをたどるハイリスク妊産褥婦の情報は継続して共有できるシステムとなっはいるが、部署が異なると情報共有の時間を持つことが難し

いこと等、院内外共に共有が困難な状況や課題が抽出された。対象となる母児に対する理解を、専門職者が共に深める場を持つことや看護記録に残していくことも可視化につながるひとつの方法であることが確認された。母親の自信を引き出す看護は難しく感じたが、看護者の能力は個々に違っており、常に同じ技術で看護を提供する事ができなくても、ハイリスク妊産褥婦の背景を理解し、ケアを提供する場面をつなぎあわせることが連携したケアとなっていくのではないかという意見も出された。様々な職種の参加者より積極的な発言や意見交換がなされ、参加者の自信にもつながったワークショップであった。

ワークショップ5：

人と地域をつなぐ・つながる－認知症支援の取り組み－



【コーディネーター】

中井 弘子

(高知県安芸福祉保健所 地域支援室長 29期)

【企画の意図】

このワークショップは、市町村の認知症支援体制構築の取り組みと認知症の困難事例をとおして相談から資源導入に至る保健・医療・介護・福祉の合意形成のプロセスと多職種連携におけるそれぞれの役割について、可視化することを目的に開催しました。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

和田 典子 氏

(香美市健康介護支援課地域包括支援センター)

認知症支援推進協議会を設置し、医療と介護の連携を軸にした取り組みについて事例とおし

て報告いただきました。

土岐 弘美 氏

(香川県立保健医療大学)

高松市の認知症高齢者事業の概要説明と高松市地域包括支援センターの地域ケア小会議において、困難事例を住民協議の場で解決に向けて導く具体的な支援について事例をとおして報告いただきました。

【ディスカッション内容】

参加者は臨床の看護師、保健師、教育関係者、学生で、ディスカッションでは地域の認知症への取り組みを聞き、それぞれの立場から感じたことを自由に話し合いました。臨床の看護師からは、認知症の患者を支えるためにどのように接すればよいか課題を感じていたが、地域ケア会議の事例報告から、現在起こっている問題について認知症の当事者の方の力や長所を客観的に捉えなおすことや当事者の希望や自己決定を尊重することが大切ということに改めて気付かされたという意見がありました。また、地域で認知症があっても生活していくためには、同じコミュニティに暮らす人たちの認知症への関心や理解を引き出すことが大切であり、住民の支援の在り方についても「自らできること」を引き出して合意させていくことで、実践的な地域の支えにつながるということが事例をとおして理解されました。活発なディスカッションとなり、参加者が支援者としてのスキルの可視化だけでなく、個の尊重という基本的な倫理観を再確認し一体感を共有できる場となりました。

ワークショップ6：

精神科医療の中で看護を可視化する方略



【コーディネーター】

小笠原 麻 紀

(高知大学医学部附属病院 修士10期)

【企画の意図】

精神科医療・看護では治療やケアにおいて多様な症状や治療、その成果の判断のしづらさがあるが、最近ではさまざまな角度から看護を可視化することに取り組みが報告されている。ワークショップでは「形にしづらい」看護の困難さと楽しさを共有し語り合う場とすることを目的とした。

【話題提供者の紹介及び話題提供者の概要】

福 田 亜 紀 氏

(高知医療センター 精神看護専門看護師
42期・修士6期)

高知医療センターでの精神看護専門看護師の役割と実践活動について精神症状に伴う身体症状の緩和ケアやせん妄に対する医療者の対応についてケースを通したかかわりを紹介していただいた。精神科看護を可視化するうえで、看護ケアを患者様・ご家族、医療者に「見せる」「伝える」方略と、組織で求められる役割に対して成果を示すことの重要性が示された。

畠 山 卓 也 氏

(井之頭病院 精神看護専門看護師)

井之頭病院で精神看護の実践者として専門的な視点で、また看護科長として管理をする立場で成果として示すこと、それぞれの専門性を融合した立場からの実践報告と課題があげられた。今改めて『精神科看護を可視化すること』とは何か、「患者様とのかかわりからみえてくること」の基本に立ち返り考える場となった。

【ディスカッション内容】

ワークショップの参加者は精神科病棟に勤務している看護師が多数を占めていたが、身体科で勤務する中で精神疾患をもつ患者様の理解やかかわり方を学び、それをスタッフ間で共有していきたいという姿勢で臨まれている参加者もおられた。

話題提供者からは専門看護師としてジェネラ

ル看護師や看護管理者に対して可視化するための視点や方法が述べられ、専門看護師としての課題があげられた。参加者からは「自分の対応が『これで良かったのか』と疑問と戸惑いで立ち止まっていたが、スタッフとのカンファレンスや看護記録で共有することで客観性をもち可視化につながるということがわかった」という意見もあり、日々の看護場面で患者様や医療者間のやりとりが大切であることが共有できた。

ワークショップ7：

終末期がん患者の在宅緩和ケアをコーディネートする看護の力



【コーディネーター】

池 田 久 乃

(高知医療センター 34期)

【企画の意図】

医療の場が施設から地域へと拡大していく中で、終末期であっても自宅での療養を可能にするために、必要な社会的資源を活用しサポート体制を整える看護の力を考えるためにワークショップが開催された。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

田 代 真 理 氏

(東京新宿メディカルセンター がん看護専門看護師 41期・修士4期)

高齢化が進み、単独世帯や夫婦のみの世帯が増加する現状の報告があり、独居のがん患者さんを自宅で看取った症例などが紹介された。

竹田 日記 氏

(高知県立あき総合病院 がん看護専門看護師 修士12期)

高知県東部の在宅医療の現状が紹介され、自宅での看取りに必要な環境の整備についての提言と共に終末期の療養場所を決定するための意思決定への介入などが紹介された。

【ディスカッション内容】

話し合いの中では、終末期のがん患者の在宅療養を支えるためには、医療者が患者のその人らしさを支える関わりを大切にする姿勢を基本に、患者を的確にアセスメントし、適切なケアプランを立案、実施していくことの重要性が確認された。その中でも症状をいかにマネジメントできるかが重要であり、たとえ医療処置が必要であっても在宅で提供できる医療も拡大してきており、サポート体制を整えることで多くの可能性を秘めている。施設で働く医療者が、地域での療養についての理解を深め、在宅医療の可能性を認識し、施設と地域が連携した一つの医療チームとして活動していくことの必要性が再認識された。今後、多死時代を迎える中で、がん医療にとどまらず、在宅での看取りを改めて考え、支援を拡大していくことが求められている。

ワークショップ 8 :

看護の実践を語ることで気づく自己の成長



【コーディネーター】

高谷 恭子

(高知県立大学 45期)

大西 ゆかり

(高知県立大学 博士8期)

【企画の意図】

卒後3年目までの参加者が、話題提供者の語る努力の軌跡を通して、自己の成長と課題を発見する機会とする。また、参加者とともに客観的に自己を見つめることで専門職としての自覚を深め、明日から担う看護の英知を見出すきっかけとしたいと考えた。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

佃 勇輝 氏

(高知医療センター 61期)

横山 祥子 氏

(高知大学医学部附属病院 60期)

福島 怜美 氏

(佐川町役場 61期)

高橋 朋子 氏

(宿毛小学校 59期)

看護師、保健師、養護教諭として活躍している卒後2～4年目の話題提供者の方々に、卒後1～3年目のことを振り返り、印象に残っているエピソードを取り上げながら歩んだ軌跡を紹介して頂いた。その時どのようなことを感じたり、考えたり、また、悩みながらも得た気づきや新たな課題を実感しながら現在に至ったのかなどの自身の成長記と今後の展望について語って頂いた。

【ディスカッション内容】

1年目の時は日々の業務を担うことで精一杯であり、自分の「看護」を実践する難しさなどが語られた。参加者からも、新人として覚えることがたくさんあり、多重課題に日々取り組む悩みが共有された。そのような中で、ターニングポイントといえる出来事、例えば急変や困難な事例に直面した時に、身近な先輩の姿を目の当たりにし、先輩がどのように看護しているのかという意図を知ったり、先輩の体験を聞く機会を得るなど、先輩の指導を得て考えながら看護実践する日々を重ねて成長してきた過程が語られた。また、新人ならではの悩みを共有したことで、「自分だけじゃない、皆も同じように取り組んでいる」ことを知り、明日からも頑張ろうと思えたようである。参加者も改めてそれぞれがそれぞれの場所で専門性を追求し、責任をもって対象に向き合うことの大切さに気づくことができたのではないかと考える。